



●海の猿

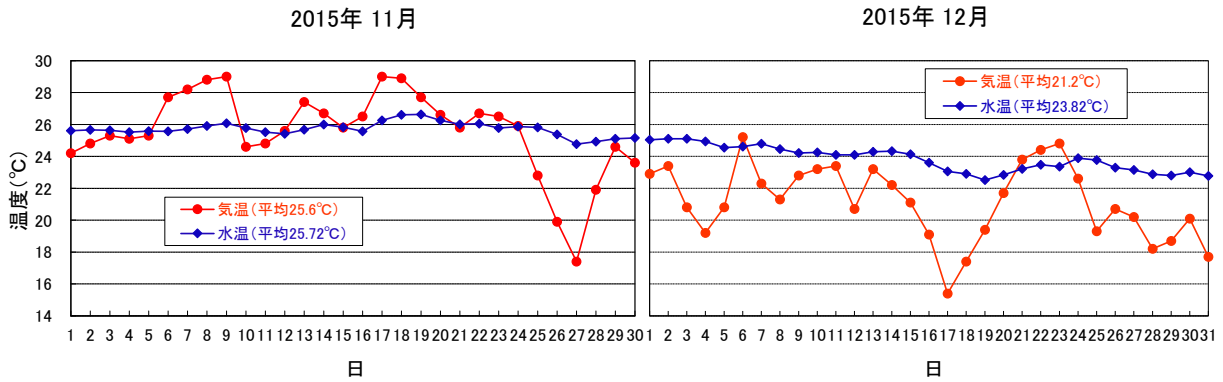
ーアルテミアー

新年あけましておめでとうございます。大晦日はいくらか気温も低かったですが、年が明けてからは、比較的暖かい正月でした。今年は^{さるどし}申年です。皆さんは、‘シーモンキー（海の猿）’という名前の生き物をご存知でしょうか。たぶん子供たちにはわからないだろうと思います。^{ねんれい}年齢が40代から50代くらいの人になら、聞いたことがあると言う人も多いでしょう。そのくらいの歳^{とし}の人が子供の頃に、学習雑誌の付録だったり、雑誌の裏表紙の通信販売の広告にさかんに^{けいさい}掲載されていたり、とても流行した時期があるのです。その頃に実際に手に入れて飼育したことがある人なら、もちろん知っていると思いますが、このシーモンキーは猿ではなく、水の中の生き物です。学名がアルテミア・サリナ (*Artemia salina*) という種で、エビやカニと同じ節足動物

^{こうかくるい}甲殻類の一つです。今回は、慶良間の海にはすんでいませんが、この‘海の猿’を紹介したいと思います。

アルテミアの成体は、脚の長いフナムシのような形をしており、内地の水田などにいるホウネンエビの仲間、もともとはヨーロッパや北アメリカにすんでいる動物です。それも海ではなく、塩水湖、つまり塩分を含んだ水をたたえた湖に生息する動物です。塩水のことを英語でブライン (brine) といい、それでアルテミアはブラインシュリンプ (塩水のエビ) と呼ばれることもあります。湖ですから、日照りが続くなど天候によっては干上がってしまうこともあるでしょうし、そこにまた雨水がたまれば湖が復活することもあるでしょう。こうした環境の変化に適応するようにアルテミアが発達させたのが、耐久卵 (休眠卵) です。アルテミアは、25%という非常に高い塩分の水 (慶良間の海水の塩分は約3.4%です) でも生息できますが、さすがにそれ以上高くなると死んでしまいます。また、すでに書いたように、湖が干上がって乾燥してしまっただけでは生きることができません。そうしたときに、アルテミアは乾燥に強い耐久卵を産み残すのです。耐久卵にはトレハロースという現在食品の保湿成分として利用されている物質が15%ほど含まれており、そのおかげで完全には乾燥しないようにできています。耐久卵は直

定点観測



径 0.2~0.3mm とひじょうに小さなものですが、一説には 10 年以上の間生き続けることができると言われてしています。そして、再び水が戻り塩分が下がると卵がふ化するのは（実験的には塩分 10%以下でふ化できますが、2~3.5%くらいに低い条件のほうがより短時間で多くの卵がふ化するようです）。

ふ化して出てくるのが冒頭の写真のノープリウス幼生です。サイズは 0.5mm ほどで、頭のとっぺんに赤い眼が 1 つだけあり、左右に伸びている翼^{つばさ}のように見えるものを盛んに動かして泳ぎます。普通に考えると、泳ぐためのこの翼のようなものは脚だと思いがちですが、実はこれは触角^{しよっかく}です。多くの甲殻類と同じようにアルテミアにも 2 対の触角があり、第 1 触角は頭の先にある短い 1 対で、泳ぎに使うのは第 2 触角です。ノープリウス幼生はこの後 10 数回脱皮を繰り返しながら、体を大きくし、脚の数を増やしていき、それにつれて第 2 触角は小さくなって、脚を使って泳ぐようになります。ふ化から 2 週間から 1 ヶ月ほどで体長 1cm ほどの親になり、寿命は 2~3 ヶ月のようです。

アルテミアは慶良間にはいない動物ですが、研究所にとってはとても重要な動物です。なぜなら、アルテミアは他の動物を飼育するときに貴重なエサとなるからです。小型の魚類やクラゲはもちろん、サンゴにもエサとして与えることがあります。アルテミアの耐久卵は長期保存が

でき、しかも簡単にふ化させることが可能なので、とても良い生きエサなのです。近いうちに、アルテミアを使って飼育した動物について、またアムスルだよりで紹介したいと思います。

● 阿嘉島の海より

アムスルだより 135 号でもお知らせしましたが、今年もあか・げるまダイビング協会の人たちと環境省「モニタリングサイト 1000」の調査を実施し、おかげさまで昨年うちに全地点の調査を終えることができました。ご協力ありがとうございました。今年度の調査で、最も印象に残ったことは、多くの地点で小型~中型のミドリイシ類やハナヤサイサンゴ類が増えており、場所によっては 40cm 以上の群体もたくさんあり、数年前に比べるとずいぶん回復してきたように見受けられたことです。また、逆にサンゴに害をなす要因である白化はほとんど見られず、オニヒトデについては、食痕^{しよくこん}らしきものはわずかにあるものの個体は目撃されませんでした。また、サンゴ食のシロレイシダマシなどは依然としていくつかの地点で見られるものの、2 年前に比べるとずっと少なくなっていました。こうしたことを考えると、これから慶良間のサンゴは、さらに回復していくことが期待できます。調査結果については、今データを分析中ですので、やがてまた皆さんに詳しくお知らせしたいと考えています。